simC News Letter
Sendai International Music Competition
2025年8月号
仙台国際音楽コンクールニュースレター ②

第9回仙台国際音楽コンクール ピアノ部門コンクール評

音楽ジャーナリスト：恒川 洋子

第 9 回仙台国際音楽コンクールは 5 月 24 日から 6 月 29 日まで、日立システムホール仙台で開催された。ピアノ部門では 34 か国から過去最高の 445 名が応募し、32 名が予選へ進んだ。セミファイナル、ファイナル、入賞者記念ガラコンサートでは、協奏曲を高関健指揮の仙台フィルハーモニー管弦楽団とともに演奏。カワイ、ヤマハ、スタインウェイの三台のピアノが用意された。

主要な国際ピアノコンクールを目指し、出場者はもちろん、ピアノメーカーや調律師も「最高」を狙っている。エリザベート王妃国際音楽コンクールとヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールが重なった 5 月の後、6 月には仙台と続き、巧みにハシゴをするコンテスタントも見られた。どのコンクールに出場しても、ファイナルでは必ず協奏曲が課される。「最後のラウンドにいくと当たり前の協奏曲が選ばれる。もう少し個性的なプログラムを組めるように選択曲を増やしていますが、なかなかチャレンジしてもらえない。日本のコンクールとして、日本の作曲家を弾く機会があっても良い。」と野平一郎審査委員長は話す。

出場者は 11 歳から 28 歳までと年齢が大きく開いていた。ここ数年、スキルも含めて個性が際立つ若い世代の日本人が目を惹いている。ファイナルには、島多璃音さんと天野薫さんが進出。

優勝したエリザヴェータ・ウクラインスカヤさん（ロシア・28歳）は、すでに教鞭をとっている。チャイコフスキーのピアノ協奏曲第 1 番変ロ短調 op.23 は、幾度も弾いてきた協奏曲。初めの頃はピアノパートを弾くのに精一杯だったが、回を重ねるごとに他の楽器のパートを聴き分ける耳が育ち、オーケストラとともに曲を仕上げる感覚が深まったと振り返る。仙台フィルハーモニー管弦楽団とは初回リハーサルから自由なやり取りができ、相互理解も理想的だったという。彼女のモーツァルトのピアノ協奏曲ハ長調 K467 は三楽章ともテンポが速く、粒のそろった美しい音質のセミファイナルの演奏を思い起こさせた。自作のカデンツァをあらかじめ「オリジナル」として申請し、コンクール後にも余韻を残したそのカデンツァは、アイデアをまとめて仙台で書き上げた。幼少期に合唱を通じて音楽に触れ、5 歳でソルフェージュを学び、その頃に 1 ページほどの作品を二曲作曲したという。

第 2 位のアレクサンドル・クリュチコさん（ロシア・24 歳）は、セミファイナルでの印象とは一変し、激情を秘めたラフマニノフのピアノ協奏曲第 3 番ニ短調 op.30 を選曲した。高度な技巧もさることながら、じっくり練り上げた第一楽章からそれぞれの楽章に散らばるクライマックスを異なるストーリーとして盛り込みながら披露した。全体的な構成もテンポ感も良く、表現力も豊かで雄大な演奏を聴衆に届け、内面の推進力も含め魅力的に響いた。

裏面に続く。

■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団　仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ケ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp

第3位受賞は最年少の天野薫さん（東京出身・11歳）。和柄のリボンを結い、ファイナルの最後を飾った。モーツァルトのピアノ協奏曲はスタインウェイで演奏し、矢代秋雄作のピアノ協奏曲ではヤマハのシャープな音色やタッチにこだわった。第一楽章アレグロ・アニマートから第三楽章のフィナーレまで、幻想的かつ東洋的な旋律が続き、テンションを保ち続けながら移り変わる楽想が楽しめた。会場では「娘の新しい表情を見守った」とお母様が語った。小学生という多感で成長著しい時期に、地元の小学校に通いながら近所の先生と相談し、今回の出場とプログラムを練り上げた。将来音楽家の道を歩むのか、別の道を切り開くのかは未定。審査委員の間からは、コンクールの年齢の下限を定めるべきではないかという意見も出た。

第4位はユリアン・ガストさん（ドイツ・25歳）で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番とモーツァルトのピアノ協奏曲ニ短調K466を選んだ。第5位は島多璃音（日本・24歳）さんで、リストのピアノ協奏曲第1番 変ホ長調S124 とモーツァルトのピアノ協奏曲ニ短調K466を、第6位のヤン・ニコヴィッチさん（クロアチア・24歳）はチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番とモーツァルトのピアノ協奏曲ニ短調K466を選んだ。セミファイナルでも選曲が7回重なったが、ファイナルでも同じモーツァルトのピアノ協奏曲が3回、ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番とチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番がそれぞれ2回ずつ重なった。

マティアス・キルシュネライト審査委員は「人生は長く、コンクールは言わば始まりに過ぎない。一生勉強し続けること、そして毎日少しずつ良くなることを惜しまない努力が大切だ」と若い才能に語りかけた。ジュゼップ・コロン審査委員は、モーツァルトのピアノ協奏曲にはオペラの“歌”、室内楽の対話、そして交響性が備わっていると指摘し、出場者にはそれぞれの音楽を自由に表現して驚かせてほしいという期待を述べた。ジャック・ルヴィエ審査副委員長も繰り返し、モーツァルトの音楽を理解するうえでオペラを知ることがいかに理想的で欠かせない要素かを語った。

セミファイナル終了の翌日から2日間にわたり、審査委員6名による公開マスタークラスが開催された。受講生は音楽家を志す学生と希望したコンクール出場者で、会場内の参加者は譜面を丹念になぞる者もいれば、午後になると制服姿の学生も増え、地域の学びの場としても機能していた。トップバッターのジャック・ルヴィエ審査委員は丹念に音作り、特に指の付け根からの力の使い方や指の戻し方を指導した。ケヴィン・ケナー審査委員はペダルやアクセントを重視し、作曲家、特にショパンを弾くにあたって声楽の人と練習すると上達するなどの助言をした。レナ・シェレシェフスカヤ審査委員は息継ぎの具体的な意識や、上から降ってくる音と共鳴する内面で響く音楽のバランス、消化、表現を助言した。ダン・タイ・ソン審査委員も指を「作る」ことの大切さやペダリングについて細かく繰り返し指摘した。それぞれの視点から受講者に具体的な示唆を与え、解釈を深める契機となった。

コンクールを支えるボランティアも高校生から社会人、主婦までと幅広く、多面的な工夫が見られた。リーダーを中心に、来場者から出場者へ向けた応援メッセージを翻訳して届けるなど、市民の声を接点に取り入れながら温かみのある支援体制を築いていた。

数年おきに開催される国際コンクールは、世代の変化を定点観測し、その個性やスキルをより鮮明に示すバロメーターである。今やストリーミングによって世界中のフォロワーが直に追いかけられる便利な時代になった一方で、教育関係者は「響き、つまり音の振動を直接ホールで聴いてほしい。国際コンクールをこの仙台で聴くのは素晴らしい機会だ」と語り、現場での音の体験の価値を強調した。

最前線で活躍する世界的スターであり当時14歳だったユジャ・ワンや、ショパン国際ピアノコンクールで優勝したブルース・リウもこの仙台国際音楽コンクールを経験している。多様な世代と挑戦の物語を抱えた国際舞台として、未来の音楽家にとっての出発点であり、挑戦と深化の場所として、世界に向けて発信し続けて欲しい。

コンクール最終日に来仙したカインラット国際音楽コンクール連盟会長はこう締めくくった。「次世代の才能ある音楽家たちを育てるという責任を担う私たちは、今こそ、橋を架ける存在でなければなりません。私たちは、狭い枠にとらわれることなく、より広い視野と深い洞察をもって未来を見つめていく必要があります。そして、もし『グローバル』という言葉がその輝きを失ったのであれば、私たちは新たなビジョンを掲げましょう――グローバルではなく、『プラネタリー』を。」

SENDAI INTERNATIONAL MUSIC COMPETITION
■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団　仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ケ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp